

第十九回南のシナリオ大賞

優秀賞

「カレイの煮付けはパンに合う？」

あらすじ

ニッコ

カレイの煮付けは  
パンに合う？

登場人物

田中浩一（62）

田中良子（60）

山木健太（27）

杉野れな（24）

スーパ―アナウンス女性

テレビアナウンサー男性

病院受付女性

子供達は独立し、夫婦二人となった田中浩一と妻の良子は、年金支給までの生活費と老後資金のため、それぞれアルバイトとパートに出る毎日。職場では、つい若い同僚に、浩一は良子の、良子は浩一の不満を口にしてしまう。しかし、その不満に同調されると、なぜか心穏やかではいられない。相手を思いやる気持ちはまだあることに気づいた二人は、還暦から始まる第二の人生こそが、夫婦の本番なのだと、改めて心を一つにする。

SE 時計の秒針音

浩一「言うなよ」

SE 昼の情報番組の音

健太「朝メシは？」

目覚まし時計の機械的な声「5時です。5時です。5時です。5時です。5時……」

浩一「そこらへんにあるバナナやらヨーグルトやらをな」

浩一「ああ、腹減った」

SE 目覚まし時計の声を止めるボタンを押す音。

健太「独り身の俺と全然変わんないじゃないですか？ やっぱ俺、別れようかなあ」

SE フライパンでご飯を炒める音

浩一「なんだ、彼女いるのか？」

良子「お帰り。お昼、もう少しでできるから」

浩一「ふう（ため息）よっこいしょ」

健太「いるはいるんですけど、最近、メッチャ結婚したいオーラ出してきた。でも、田中さんの話聞いてたら」

浩一「なんだ、またチャーハンか」  
良子「文句を言わない。油も卵も、もの凄く値上がりしてるのよ。あ、ちよっとその皿とって」

SE 布団から出る音。

スーパーアウンス女性「開店時間です。今日も気持ちよくお客様をお迎えしましよ

お皿とって」

スーパーアウンス女性「まもなく9時です。

う」

浩一「これか」

商品補充最終チェックお願いします」

SE 皿をとるカチャカチャという音

浩一「500ミリの牛乳はOKだ」

M 明るいアップテンポの曲

健太「1リットルも補充OKです」

SE フライパンから皿にチャーハン

浩一「しっかし、開店前のスーパーの冷気は

浩一と健太「いらっしやいませ」

を移す音

半端じゃないな」

健太「寝てる奥さん横目に職場に来るんじ

SE 家の玄関が開いて閉まる音。

良子「はい、いつもより 美味しいわよ」

や、心も冷えっ冷えっすよね」

浩一「いつもとなにか違うのか」

良子「空きっ腹と出来立ては、最高の調味料」

浩一「どこがいつもより美味しいだ」

良子「じゃ。私、今日遅番だから。4時には

洗濯物とり込んでよ」

浩一「ああ」

良子「ご飯も炊いといてね。2合」

浩一「言わなくてもわかってるよ」

良子「お父さん、最近忘れっぽいから」

浩一「お互い様だ」

良子「私は平気よ、お父さんより若いし」

浩一「62も60も変わらん」

良子「2歳も違うわ。じゃ」

SE 玄関扉が開いて閉まる音。

浩一「やれやれ。えーと、リモコン、あった、

あった」

SE 徐々に大きくなる情報番組の音

SE 微かに聞こえる救急車の音。

自動ドアが開く音と同時にピンポンと  
いうチャイムの音

機械音「ただいま50番までのお薬ができて

います」

病院受付女性「山田さん、山田のりこさん、

6番窓口までお越しください」

SE カートをガラガラと押す音

良子「内科病棟のリネンはこれで全部ね」

れな「外科病棟も回収終わりました」

良子「じゃ、ここにいれちゃって」

れな「ハイ」

SE 沢山のリネンを手で持って

移す音。

れな「それにしても、田中さん、旦那さんの

昼ごはん作ってからパート来るなんて偉  
すぎですよ」

良子「でしょ？ なのに、またチャーハンか  
とか言うのよ。出世にはとんと縁がない人

だったから、子供二人大学生のときは、学  
費に仕送りに、やりくり大変だったわ」

れな「やっぱ、男はお金ですか？」

良子「もちろん！ お金、お金。れなちゃん、  
私みたいに失敗しちゃダメよ！」

SE 玄関が開いて閉まる音

SE テレビからコマーシャルの音。

良子「やだー！」

SE 電気をつける音。

浩一「わ、何すんだ。眩しいだろ」

テレビアナウンサー男性「7時のニュースです」

良子「テレビつけっぱなし！」

浩一「ついウトウトとしちまった」

良子「あ！」

浩一「なんだ？ 帰ってきた早々」

良子「洗濯物、取り込んでないじゃないの！」

SE 窓を開ける音。

良子「あああ、湿ってる。明るいうちに取り

込まないとダメなのよ。あ！」

浩一「なんだ、今度は。騒々しい」

良子「もしかして……」

SE 炊飯器の蓋を開ける音。

良子「もう！ 炊いといつて言ったじゃない。どうすんのよ。値引きのおかず買ってきたのに」

浩一「メシが炊けてないくらいで。大げさだぞ」

良子「じゃあ、買ってきたおかず、なにで食べろって言うのよ」

浩一「パンでもうどんでもあるだろ」

SE 勢いよく炊飯器の蓋を閉める音

良子「じゃあ、パンにしましょ。あなたトースト焼いて。私、買ってきたカレーの煮付け温めるから」

浩一「さすがにパンにカレーの煮付けは

合わんだろ」

良子「知らないわよ！」

M 微かに聞こえるアップテンポの明るい曲

健太「あはは（笑い声）。で、カレーの煮付けおかずにトースト食ったんですか」

浩一「ひどいだろ。いくらメシ炊き忘れたからって、それはないよな。洗濯物も取り

込んでなかったから、機嫌悪いのなんのつて。今日も朝から口聞いてないよ」

健太「あの、なんで離婚とかしないんですか？」

浩一「離婚？」

健太「田中さん、給料全部奥さんに渡してるんですよね」

浩一「ああ」

健太「家も建ててあげて、子育て中は専業主婦で」

浩一「まあ」

健太「奥さん、欲張りすぎですよ。今どきの女子が欲しいもの、全部手に入れてるじゃないですか」

浩一「そうなのか？」

健太「専業主婦って、なんだかんだ、女子の憧れです。俺は、夫と書くほうの専業主夫に憧れますけど」

浩一「でも、俺、子育ては任せっきりだったし……九州あちこち転勤して、単身赴任もあつたしなあ」

健太「給料全部家族に貰いだんだから、あいこです。稼ぎ頭としてもっと大事にしてもraithたい気持ち、わかります！」

浩一「大事についていうか、あ、誕生日にはケーキ焼いてくれるぞ」

健太「朝起きなくて、誕生日にケーキ焼くつて、メンヘラ女子みたいですね」

浩一「メンヘラ女子？」

健太「こっちの事情はお構いなしに自分のしたい事だけを押し付けてくる女子のことですよ」

浩一「いや、うちのはそんなんじや」

健太「どっちにしても、おれ、結婚はやっぱり回避っす」

SE カートを転がす音

沢山のリネンを手で持って移す音

良子「でね、洗濯物もとり込んでなけりや、ごはんも炊いてないのよ」

れな「で、パンにカレイの煮付け」

良子「(意気込んで) 反撃してやった」

れな「良子さん、そもそも夫婦ってどうしてずつと一緒にいられるんですか？」

良子「え？」

れな「世の中のおじさんつて、正直ぱつとしない人ばかりじゃないですか。電車の中で情けなく居眠りしたり、良子さんの旦那さんみたいに出世とは縁が無かったり」

良子「ズバツと言うなあ」

れな「私、そういうおじさんたちにも奥さんがいるのが不思議でたまんないというか」

良子「……で、でも、お父さんが一生懸命働いてくれたから、なんとか子供二人大学に行かせることできたし、ほ、ほら、小さいけどマイホームもね」

れな「でも良子さん、今その歳でパートしてるじゃないですか？」

良子「ま、まあ」

れな「私、今付き合ってる人いるんですけど何を勘違いしてるんだか、向こうは私が結婚したいと思ってるらしくて、ことごとく防線張ってくるんですよ」

良子「結婚したくないの？」

れな「結婚したくないというか、今の彼の将来性とかメリットあるかとか、考えちゃいますよね。あ、良子さんは、どうして今の旦那さんと結婚したんですか？」

良子「同僚。会社の同期入社でね」

れな「へえ」

良子「で、お父さんが東京から熊本に転勤することになって、一緒にきてほしいってれな「よく決断しましたね、どのくらい付き合ってたんですか？」

良子「いや、付き合ってたわよ」

れな「え？ どういうこと？」

良子「転勤するから結婚してくださいって」

れな「え〜！ 交際ゼロ日婚ってやつですか？」

良子「今の時代で言うところ、そうなのかしら」  
れな「だってどんな人かもわかんないじゃないですか」

良子「うーん、でも、真面目な仕事ぶりは毎日見てたし、同期の飲み会とかで、人となりはわかってたし……」  
れな「そんなもんですかね〜。ま、私は、もう少し結婚相手探します」

SE 微かに聞こえる信号機の音  
車の走る音  
バスの「発車します」のアナウンス  
ストドアが閉まる音

良子「お父さ〜ん」  
浩一「なんだ、デカイ声で後ろから」  
良子「お仕事、お疲れ様」  
浩一「朝と随分違うな」

良子「ねえ、そのレジ袋の中身、なに？」  
浩一「あ、いや……」

良子「なに？ なに？」  
浩一「あ、そんな子供みたいに取るな」  
良子「あ、どら焼き！ しかも20パーセント引きシール付き」

浩一「……や、安かったし」  
良子「お父さんのおごり？」

浩一「ああ」  
良子「わかった！ 昨日の罪滅ぼしだ」  
浩一「ちがう、お前、値引きシール好きだろ」  
良子「大好き」

浩一「だ、だからだよ」  
良子「（疑うように）ふ〜ん、ねえ、お父さん」  
浩一「ん？」

良子「私も65までは働くからさ」  
浩一「無理するな。なんとかするから」  
良子「平気。平気。だから、2人でがんばって老後資金貯めようね」  
浩一「老後資金か…… 子供には頼れんな」

良子「そうだよ。還暦迎えて、私たち夫婦はこれから本番。お互い、救急車呼び合える仲でいようよ」

浩一「（優しい口調で）……そうだな」  
良子「ああ、お腹空いた。ねえ、今日の昼もチャーハンでいい？」

浩一「白メシ、ないだろうが」  
良子「そうだった。じゃあ、パンで」  
浩一「パンとどらやきか。変な昼飯だな」  
浩一と良子「アハハ（大笑い）」

（終）